

平成二二年度 国際子ども図書館 児童文学連続講座
日本の児童文学者たち

金子みすゞ―読みものとしての童謡―

平成二二年十一月九日（火）

藤本恵（都留文科大学文学部初等教育学科准教授）

今日の内容

1. みすゞの生涯と、その伝説化 ……資料1・2
2. 国語教科書の中のみすゞ ……資料3・4
3. みすゞ童謡の読まれ方と、その問題点 ……資料5
4. 童謡をもっと楽しむために ……資料6

*年譜は、『新装版金子みすゞ全集』（JULA出版局 S59・8所収）より抜粋

写真は、「別冊太陽 日本のこころ 122 号 金子みすゞ生誕 100 年」（平凡社 平 15・4）より抜粋

資料 1
金子みすゞの
生涯と伝説化

●年譜●

明治 36 年（一九〇三）	0 歳	4 月 11 日、山口県大津郡仙崎通村大字瀬戸崎浦七百九十番屋敷にて、父金子庄之助、母ミチの長女として生まれる。本名テル。
38 年（一九〇五）	2 歳	2 月 23 日、弟正祐生まれる。
39 年（一九〇六）	3 歳	父庄之助が、下関の上山文英堂書店支店長として清国に渡ったのは、この年か。
40 年（一九〇七）	4 歳	2 月 10 日、父庄之助、清国営口にて死去。金子家は、仙崎にて書店を営む。
41 年（一九〇八）	5 歳	1 月 19 日、弟正祐、上山文英堂書店店主上山松蔵・フジ夫妻と養子縁組。
43 年（一九一〇）	7 歳	4 月 1 日、兄堅助、瀬戸崎尋常小学校入学。
大正 5 年（一九一六）	13 歳	2 月 28 日、瀬戸崎浦八百六十一番屋敷に本籍変更。
		4 月 1 日、瀬戸崎尋常小学校入学。
		3 月 20 日、瀬戸崎尋常小学校卒業。
		4 月 11 日、郡立大津高等女学校入学。5 月、校友誌『ミサヲ』第 3 号に「ゆき」発表。
6 年（一九一七）	14 歳	5 月、『ミサヲ』第 4 号に「我が家の庭」。
7 年（一九一八）	15 歳	5 月、『ミサヲ』第 5 号に「さみだれ」。
8 年（一九一九）	16 歳	11 月 8 日、上山フジ死去。
9 年（一九二〇）	17 歳	5 月、『ミサヲ』第六号に「社会見学の記事」。
12 年（一九二三）	20 歳	8 月 26 日、母ミチ、上山松蔵と再婚。金子家は、祖母ウメ、兄堅助、テルの三人となる。
		3 月 24 日、郡立大津高等女学校卒業。以後、下関の母のもとに度々でかけている。9 年から 12 年の間に、兄堅助、大島チウサと結婚。
		5 月 3 日、下関市黒川写真館にて写真撮影。4 月末から 5 月初ごろに下関の母のもとに移り住み、間もなく西之端町商品館内の上山文英堂書店支店で働き始める。
		6 月初ころより、ペンネーム「みすゞ」で童謡を書き、雑誌に投稿を始める。雑誌『童謡』9 月号に「お魚」「打出の小槌」、『婦人倶楽部』9 月号に「芝居小屋」、『婦人画報』9 月号に「おとむらひ」、『金の星』9 月号に「八百屋のお鳩」を発表。『金の星』を除く三誌は、西條八十の選。以後、昭和 3 年までに、五十六編を発表する。
		4 月、西條八十渡仏。
		この年、童謡詩人会発足。
大正 13 年（一九二四）	21 歳	佐藤義美、島田忠夫、渡辺増三等の『曼珠沙華』に参加。自選詩集『琅玕集』を始める。
大正 14 年（一九二五）	22 歳	2 月、上山文英堂書店で働いていた宮本啓喜と結婚し、下関市大字関後地村一七二四に新居をもつ。後に上新地に転居。
15 年（一九二六）	23 歳	3 月、西條八十帰国。
		童謡詩人会に入会。7 月発行の『日本童謡集』（童謡詩人会編）に「大漁」「お魚」の二編がのる。雑誌『童謡』は、7 月号で廃刊となる。
昭和 2 年（一九二七）	24 歳	11 月 14 日、長女ふさえ生まれる。
		夏、下関駅で西條八十に会う。
		8 月 12 日、祖母金子ウメ死去。
3 年（一九二八）	25 歳	10 月、熊本市の宮本家に里帰りする。11 月 14 日、下関に戻る。
		3 月、島田忠夫、商品館にみすゞを訪ねるも、上新地の自宅に病臥していて会えず。
		11 月号の『燭台』に「日の光」、『愛謡』に「七夕のころ」を発表。これ以後発表作なし。
4 年（一九二九）	26 歳	娘ふさえの言葉を採集する『南京玉』を書き始める。
5 年（一九三〇）		2 月 9 日、『南京玉』止む。
		2 月 27 日、宮本啓喜と離婚。3 月 9 日、下関市亀山八幡宮隣り三好写真館にて、最後の写真を写す。3 月 10 日、上山文英堂書店内で死去。享年満二十六歳。

＜女学校時代のみすゞ＞



資料2 大正期の童話・童謡ブーム

A 雑誌『童話』通信欄

①私は今受験準備中で苦しめられておりますが、其苦痛を、童話の綺麗な気持ちのよい筆の力で慰められてゐるのです。どうぞ大好きな、かあらしい皆さんと、遊戯室で一しよに遊ばせて下さい。(鈴木基 大9・5)

②私は紺の前だかけの商人です。私の頭は毎日お金儲けのことばかりで毛虫のやうになつてゐます。けれど童話が、私に新しい力を与えてくれます。私は甘いお乳をのむ様にこの清新な雑誌をむさぼり読むのです。私はその時は幸福を感じます。(山田月草 大11・6)

③現代の大人がもつと真面目に童話や童謡を読んでもいゝと考へます。「童話」の童謡欄につどふ人々を最もなつかしく思ひます。(原つねを 大13・12)

④私は今三越の寄宿舎にゐるのです。(中略)夜、ひとりで読書室などにあると、遠い故郷のことなどが思い出されてひとりで、涙ぐましくなつて来ます。さういふ時には「童話」(中略)をよんで慰められてゐる孤独なさみしい少年です。(松野とし光 大15・1)

B 関英雄「大正期童話と西条八十」(日本童謡 昭45・12)

雑誌『赤い鳥』の創刊(大正七年)に始まる大正期の新童謡運動は、日本に初めて児童文学の黄金時代を現出した。児童文学を語る者は、すべて、一どはこの時代をふり返らねばならない。

この期の芸術的児童文学の主流は、いわゆる“童心文学”であり、“童心文学”だが、その童心文学の本命は、童話よりもむしろ童謡にあった、とかえりみて確信できる。この空前にして、多分絶後といえるだろう童謡の花園時代をつくった、北原白秋、西条八十、野口雨情の三人の代表的詩人の中で、少年時代のわたしは、八十の童謡に最も多く親しみ、その作品の心底からのファンのひとりだった。というのは、小学校上級から、小学校卒業後の二、三年に至る間に、わたしの愛読していた雑誌『童話』の巻頭に、八十の新作童謡が発表されていたからだ。

(中略)八十が選者をしていた雑誌『童話』の投稿童謡欄の作品には八十に影響された感傷主義的作風の童謡が多く、のちに一家を成した佐藤義美をはじめ、平林武雄や天折した渡辺増三、金子みすず、鹿山映二郎ほか雲の

ごとく集まつて、『赤い鳥』童謡欄とはちがう魅力で青少年詩人たちの道場となつていた。

C 和田北斗「童謡を書くということ」『童話』童謡投稿欄と西条八十(リテラシー史研究 平21・1)

『童話』の投稿欄を見ると、同時代の若き人々にとって、八十の童謡は、書き手としての自らの未来を見出し得るものであり、それゆえに『童話』投稿欄にはこれほど多くの人々が集まつたと考えられるだろう。(中略)「童話」投書会」を結成したというような読者の動きは通信欄などにたびたび現れている。小学生の投稿者たちは教師の指導の下、学校を媒介に創作することができたが、そのような指導システムに属していないティーンエイジャー以上の投稿者たちにとつては、か細いネットワークであっても、創作を続けるうえでは重要な場であつただろう。大正期にメジャーな童謡作家が雑誌で新作童謡を発表するということは、読者のネットワークやコミュニティに刺激を与えることでもあつたのである。(中略)大人たちの創作・投稿意欲に、雑誌が支えられたからこそ、大正期の童謡は短期間に多くの傑作を生み出したとも言えるのである。

D 西条八十「現代童謡論」(新潮社 大13・7)

読者の側から云へば、最も優れた童謡とは、単に児童が誦して興味あるばかりでなく、その親たる成人が誦して見ても、どこか或る深き啓示を受けるが如き作品を意味するのである。さうしてまた一方作者の側から云へば、その謡は単に児童を欣ばしめるのみならず、どこまでも作者の簡性がはつきりと印象されたものでなければ、而して作者の芸術的道念を満足させるものでなければならぬ。

これを要するに、童謡は遂に詩でなければならぬ。詩の中に偶々発見されるところの、児童にも解し易い作品——それぞ裏にも述べたやうに真の意義の童謡でなければならぬ。

これを要するに、私たち詩人が童謡制作の目的は、従来の児童教育に於ける唱歌なるものが、或は単に教化のため、又は知識普及のため等、主として所謂「手段としての童謡」であつたことに慚らず、芸術的香気ある歌謡、——即ち詩を直接に児童教育の上に働かさんとするに在る。

*引用は、『西条八十全集 第十四巻 童謡・歌謡・民謡論』(国書刊行会 平5・7)による。

資料3 くみずの童謡

私と小鳥と鈴と

私が両手をひろげて、
お空はちつとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のやうに、
地面を速くは走れない。

私がからだをゆすつても、
きれいな音は出ないけど、
あの鳴る鈴は私のやうに
たくさんな唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、
みんながつて、みんないい。

光村図書出版③平 8、

大阪書籍③平 12、 14

大漁

朝焼小焼だ

大漁だ

大羽鰻の

大漁だ。

濱は祭りの

やうだけど

海のなかでは

何萬の

鰻のとむらひ

するだらう。

日本書籍⑤平 14、 16

星とたんぽぽ

青いお空の底ふかく、

海の小石のそのやうに、

夜がくるまで沈んでる、

昼のお星は眼にみえぬ。

見えぬけれどもあるんだよ。

見えぬものでもあるんだよ。

散つてすがれたたんぽぽの、
瓦のすきに、だアまつて、
春のくるまでかくれてる、
つよいその根は眼にみえぬ。

見えぬけれどもあるんだよ。
見えぬものでもあるんだよ。

学校図書⑤平 14、 ③平 17

不思議

私は不思議でたまらない、
黒い雲からふる雨が、
銀にひかつてゐることが。

私は不思議でたまらない、
青い桑の葉たべてゐる、
蠶が白くなることが。

私は不思議でたまらない、
たれもいぢらぬ夕顔が、
ひとりではらりと開くのが。

私は不思議でたまらない、
誰にきいても笑つて、
あたりまへだ、といふことが。

東京書籍④平 8、

大阪書籍③平 17

雀のかあさん

子供が

子雀

つかまへた。

その子の
かあさん
笑つてた。

雀の

かあさん

それみてた。

お屋根で

鳴かずに

それ見てた。

芒とお日さま

——もうすこし、

——もうすこし。

芒はせい伸びしてゐます。

あまり照られてしほれそな、
白いやさしいひるがほを、
どうにか、蔭にしてやろと。

——もうすこし、

——もうすこし。

お日はぐづぐづしてゐます。

まだまだ籠は大きいに、
あれつぽちしかよう刈らぬ、
草刈むすめがかあいそで。

こころ

お母さまは
大人で大きいけれど、

お母さまの

おこころはちひさい。

だつて、お母さまはいひました。
ちひさい私でいつぱいだつて。

私は子供で

ちひさいけれど、

ちひさい私の

こころは大きい。

だつて、大きいお母さまで、
まだいつぱいにならないで、
いろんな事をおもふから。

*引用は『新装版金子みすゞ全集』(JUL
A出版局 S 59・8)による

資料 5

～「私と小鳥と鈴と」の読み方

a. 村中李衣「金子みすゞの創作空間」(『文藝別冊(総特集)金子みすゞ』H12.1)

b. 川崎節子「教科書に入った金子みすゞの童謡詩」(『言語科学研究』H14.3)

教育現場の多くでは、「一人一人が違うことの良さ」として、この詩の主題を規定しているが、それは臨教審の「世界の中の日本人」を育成するための重要な柱の一つである「多様な文化の優れた個性を深く理解する能力」を強調しようとするあまりに主題を歪曲したのではないだろうか。金子みすゞの詩そのものの中には、自己の内面をみつめる姿勢があるだけであり、この世の中の人々一人一人を示唆してなどいない。

(中略)

この村中の指摘をさらに分析する形で、「みんなちがってみんないい」を、「他者との対立点」を含むものとしてとらえる人に詩人長谷部奈美江がいる。長谷部は「彼女は『みんなちがって、みんないい』とお札のように繰り返す人たちは違って他者との対立点がちゃんと見えていた」(『みすゞと『わたし』』『総特集金子みすゞの没後70年・文藝別冊・河出夢ムック』2000)と、詩人の「こだわり」の構造をときあかしている。

みすゞの詩の中の「わたし」とは、詩を書くことによるのみ、自分自身の存在を自覚している当の本人であり、「みんなちがってみんないい」とは、みんなの生き方のことを言っているのではなく、「わたし」自身の生き方を言いたいために使った言葉なのである。すなわち「みんなちがってみんないい」とは、違ったみんなの多様性や個性を認め合おうという意味で使っているのではなく「みんなと違う自分を貫いて生きる」という詩人自身の自己意識、自己肯定の意志であることを、村中も長谷部も指摘しているのである。

教育現場では、みすゞの詩の「みんなちがってみんないい」が、詩人の強烈な自己意識の表れにほかならないことを軽視している。教科書本文中の解説や、指導書の主題、また道徳副読本もすべて、「人はみんなそれぞれに良さがある」ということを主張する詩として解釈している。

うずもれていた郷土の童謡詩人として、十年くらい前から彼女のことが話題にのぼるようになって、私にはさしたる関心がなかった。ただ、小学校や中学校を訪ねれば、校長先生の達筆でみすゞの童謡が清書され額に入っていたり、色紙として飾られていたり。卒業式や入学式では、決まってだれかの挨拶に引用されたり。なるほど、教育現場は、「みんなちがってみんないい」のことに敏感なんだなあ、ぐらいいいか思っていたいなかった。ところが、今年四月、小学三年生になる娘の授業参観に出掛けたことで、みすゞの童謡と改めて向き合うことになった。「わたしと小鳥とすずと」(光村図書)の授業だった。

教室では、班別ごとに工夫した群読の発表を行っていた。どの班も、読み方の違いこそあれ、小鳥パート、鈴パート、みすゞパートに別れ、順番に読んでいくことに変わりはなかった。ところが、娘たちの班だけが違っていた。徹頭徹尾ひとりの子が読み通したのだ。そして、他の子供達は机に顔をふせていて、一連めの「私のように」、二連めの「私のように」、そして三連めの「それから私」のところだけ、顔をあげてことばを重ねてみせた。その意表をつく表現に、教室は大笑い。しかし、班の子供達はおおまじめで、

「この詩はみんなで読まんほうがいいと思います。」「みすゞは、『私のように』『私のように』って、ずっと『自分のこと』を考えてるような気がするから。」

「小鳥やら鈴やらの気持ちも声も聞こえんから、みすゞの声だけでやったほうがええと思いました。」

極め付けに娘が立って「みんなちがって、みんないい」と書いてあるけど、ほんとはそんな風に思えんから、『みんないいと思えたらいいなあ』と考えたんじゃあないかなあ」といつてのけた。教室じゅうが、しーんとなった。先生が、「なかなかユニークやね」といつて、それでおしまいになった。教室のうしろの大人たちの緊張がほぐれた。でも……。

これまでみすゞ作品については、「技法そのものだけについて学んだり、分析的に読んだりすると、みすゞの世界が心の中にすーっとしみ込んでこないような気がしてなりません。」(阿部勉)というような捉えられ方が主流であったように思う。しかし、実際には「みすゞの世界」といなが、多くの読者が、選ばれたことばの意味内容に終始し、なぜそのことばを選ばずにはいられなかったのかという、みすゞ自身のところのありようにまなざしを向けようとはしていなかったのではないか。そこで、いったん感傷的な読みをやめ、その表現形式の側から目を凝らして見ることで時代と生活背景の中でみすゞがつくりだした童謡空間を問うてみたいと思った。

(中略)

このように、ながめてきて、みすゞの世界について臆けながらみてきたことがある。まず、創作全般にわたって対比

(中略)

表現が多いことについては、レトリックの未熟さという問題もあるが、そのものの価値が単独で認められたい状況と、その中でいつもあたりを見回し、まわりとの折り合いをはかりはかり生きなくてはならなかったみすゞの心の縛りのようなものが現れているのではないか。しかしそれゆえ、じっと身をひそませ、片隅から目を凝らすことで思いもよらぬものの捉え方、一連ごとの視点の転換の大胆さといった、みすゞ特有の表現も一方で生み出されたような気がする。また、精神的に追い詰められた時に却って、後者肯定、或いは後者容認の対比表現がみられたことについても、みすゞにとって、童謡を書くということは、「自分の存在をなんとか自分自身で意味あるものと認めていこう」とする、祈りにも似た作業だったのではないかと推測される。

資料 6 〈読者の描くみずぶ像

「金子みずぶは、どんな人？」

①多面的な視点で一つの物事を見られる人。また読者にもその点を考えさせてくれる人だと思います。(院 1)

②詩を通して読む人にたくさんのかんことを考えさせることのできる人物だなと思った。人と人との関係や、その他のつながりをとっても上手に言葉にして私たちに伝えていけるな—と思った。(初教 2)

③日常の一場面を、多方面から見ることのできる人だと感じた。対比が多いのも、作者の物に対する見方が柔軟であったからであると思う。ただ、少しものさびしい印象を受ける作品が多かったので、日常のわびしさなんかを感じている人であったのかもしれないと思った。(初教 2)

④きつと日常生活で見逃してしまうようなことを気づける人で、それに気づいた時の自分の切なさや悲しみなどの感情を例えるのが上手な人なんだろう—と思った。(初教 2)

⑤色々な人のことを考えすぎる優しい人だと思いました。自分が幸せでも、相手の側から見たら、そうではないということには、なかなか気付けないけれど、同じものを見ていても、様々な角度から、物事を見ている気がして、詩を読んでいて、はっとすることがたくさんありました。(国文 2)

⑥自分以外の者の立場をすごく大切にしていた人なのではないか—と思います。三作品とも、さまざまな目線から書かれているところからそう考えました(「こころ」は本来の自分とはちがう、子どもという目線になっている)。(国文 4)

⑦つねに物事を色々な角度から見ようとする人だ—と思いました。自分が思うこと、相手が思うことをいつも考えていそう…。対比が多いのはそのためだと思います。(初教 2)

⑧小さなもの、弱いものに注目したり(雀のかあさん)、芒とお日さまのように、それぞれの思いやりの気持ちの温かさ、だけど両方ともうまくいかない無力さなど、

弱いものがどうにもできない切なさのようなものを詩から感じます。金子さんも女性なので当時の社会の中でそういった思いを感じたりしたのかな—と思います。(社会 3)

⑨小さいもの、弱いもの、はかないものに心を寄せている詩が多いな、と思う。金子みずぶ自身、自分は小さい、弱いというコンプレックスを抱えていたのではないだろうか。だから、自分と似た立場に置かれていることを対象とした詩をたくさん書いていっているんだろう。(社会 3)

⑩やわらかいイメージの詩が多いのだが、作者自身を思わせることも多く、エゴイストのような気もする。いい意味でとれば、自分をしっかりと持っている人だ—と思う。(初教 4)

⑪あまり幸せそうな人生ではなかった印象を詩から受けます。自分は弱い者で、強い者や社会に打ち勝つことができずに、自分のような小さき者へのいたわりの心や理解を詩に反映して、心を解放させようとしたのかも知れない—という感じを受けた。(英文 4)

⑫3つの詩に使われていた対比の技法から、観察力のある良い意味で「よそ見」のうまい人だ——と思った。詩の内容が日常的なことからそれがより感じられた。(初教 2)

⑬現実主義な方だ———と思います。子供や生活の中でのことをとらえていることや、思いやりがすれちがっていたり、雀の詩でもあったような、あたたかさだけでなく切なさを表現しているところが、そう思った理由です。(初教 2)

⑭どこか客観的に見ていると詩の中から感じられるので…評論家ですかね。(社会 4)

*都留文科大学の授業「国語教材研究C」(平成 22 年度前期)の受講生が、授業内で教員の求めに応じて寄せたコメントより引用